

2022.10.03 於:復興庁

[第1回 持続可能な復興広報を考える検討会議]

福島県産品の復興に係る四層 の課題とコミュニケーション上の留意点

筑波大学人文社会系 教授

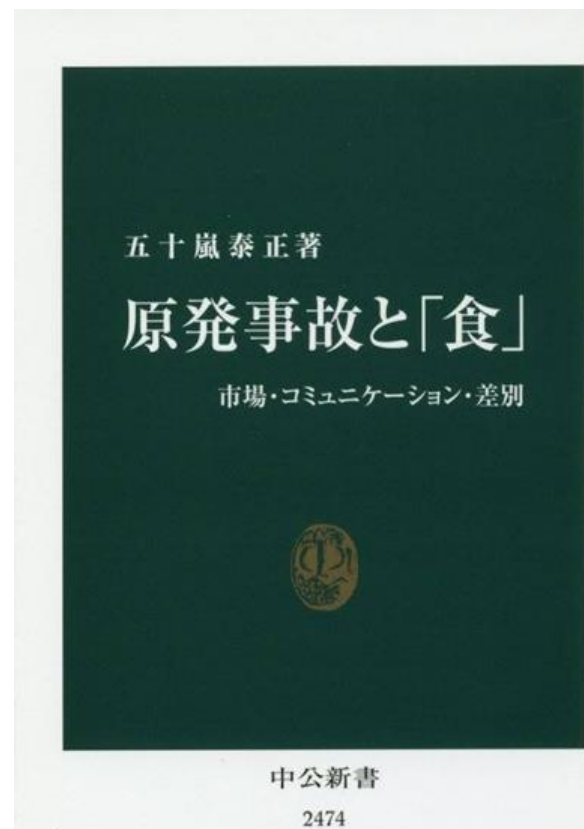
五十嵐泰正

『原発事故と「食」』（中公新書、2018）

福島県産品に対してのさまざまなスタンスを持つ層に有効な「伝えかた」は違う、それをプラグマティックに考えてみる

科学の問題としては決着がついても、社会の問題としては何も終わっていないという認識

社会学者なのだから科学の言葉ではなく、あくまで社会の言葉で考えることを目指した本



そもそも個人的な選好であるはずの「食」で、なぜ「べき論」が語られたきたのか

原発事故後の社会的諸課題を政治化しないために必要な原則：

- 【1】 科学的なリスク判断
- 【2】 一次産業を含めた復興
- 【3】 原発事故の責任追及
- 【4】 将来のエネルギー政策

4つの連関する諸側面を「あえて」切り分けて議論する必要性

あくまで「福島県産品」の需要拡大という 【復興】を考えた場合の4つのレイヤー

[1] 「売ってないものは買えない」

: 流通段階で棚を失ったことによる「風評」被害の固定化

[2] 「普段は意識してないけど、なんとなく不安」

: 情報のアップデートが進まず、事故当初のイメージが残る「悪い風化」

[3] 「行政の発表や専門家の言うことが信用できない」

: 科学的正しさ以上に信頼構築をめぐる課題

[4] 「どうしても食べる気にならない」

: 価値観の異なる他者の選択にどう向き合うかという社会的規範

「入口」と「出口」で最も高度な安全性が 確認されているコメ

出口＝全量全袋検査

		25bq/kg未満	25～50Bq/kg	51～75Bq/kg	76～100Bq/kg	100Bq/kg超
2012年産	検査点数	10323674	20357	1678	389	71
	割合	99.7826%	0.1968%	0.0162%	0.0038%	0.0007%
2013年産	検査点数	10999223	6484	493	323	28
	割合	99.9334%	0.0589%	0.0045%	0.0029%	0.0003%
2014年産	検査点数	11013045	1910	12	2	2
	割合	99.9825%	0.0173%	0.0001%	0.00002%	0.00002%
2015年産	検査点数	10498050	647	17	1	0
	割合	99.9937%	0.0062%	0.0002%	0.00001%	0%
2016年産	検査点数	10255166	417	5	0	0
	割合	99.9959%	0.0041%	0.00005%	0%	0%

「入口」＝生産段階での対策の確立・普及

- 土壌中の交換性カリウム量が決定要因という研究結果が2013年に発表
- 土壌中のカリウム量を決めるのは施肥の管理と継続的な土壌分析
- 福島等の農家への放射能低減の営農知識の普及こそが最も大事ということ

出典：放射性セシウム濃度の高い米が発生する要因とその対策について

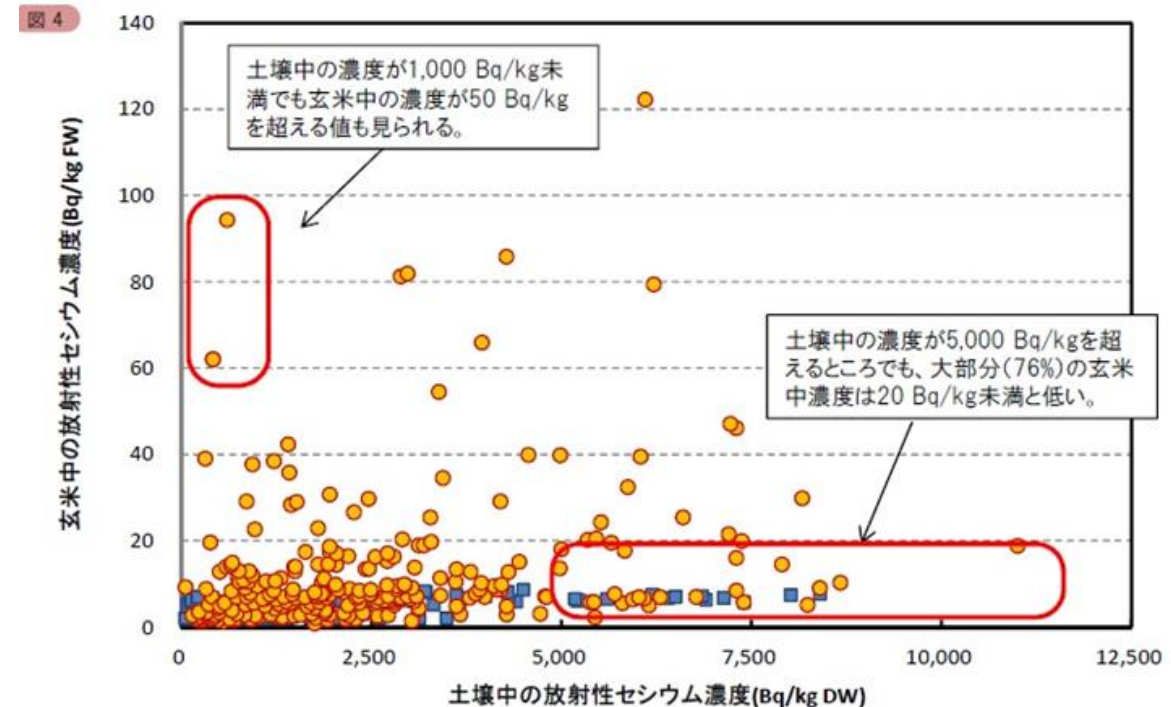
(農林水産省・福島県、2013年1月)

http://www.maff.go.jp/j/kanbo/joho/saigai/pdf/youin_kome2.pdf

ア 土壌中の放射性セシウム濃度

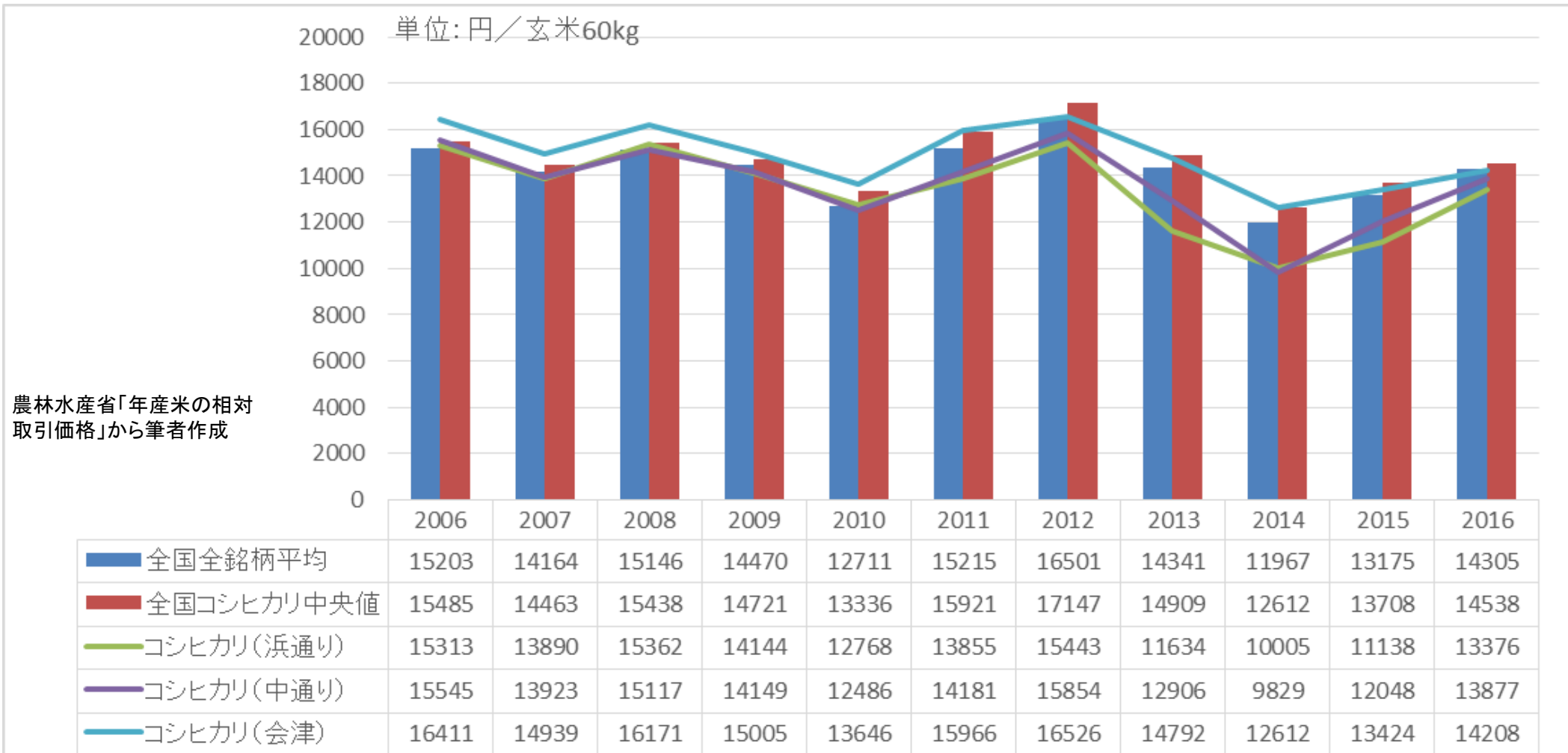
- 土壌の放射性セシウム濃度と玄米中の放射性セシウム濃度の間には相関は見られない。

土壌中の放射性セシウム濃度と玄米中の放射性セシウム濃度の関係



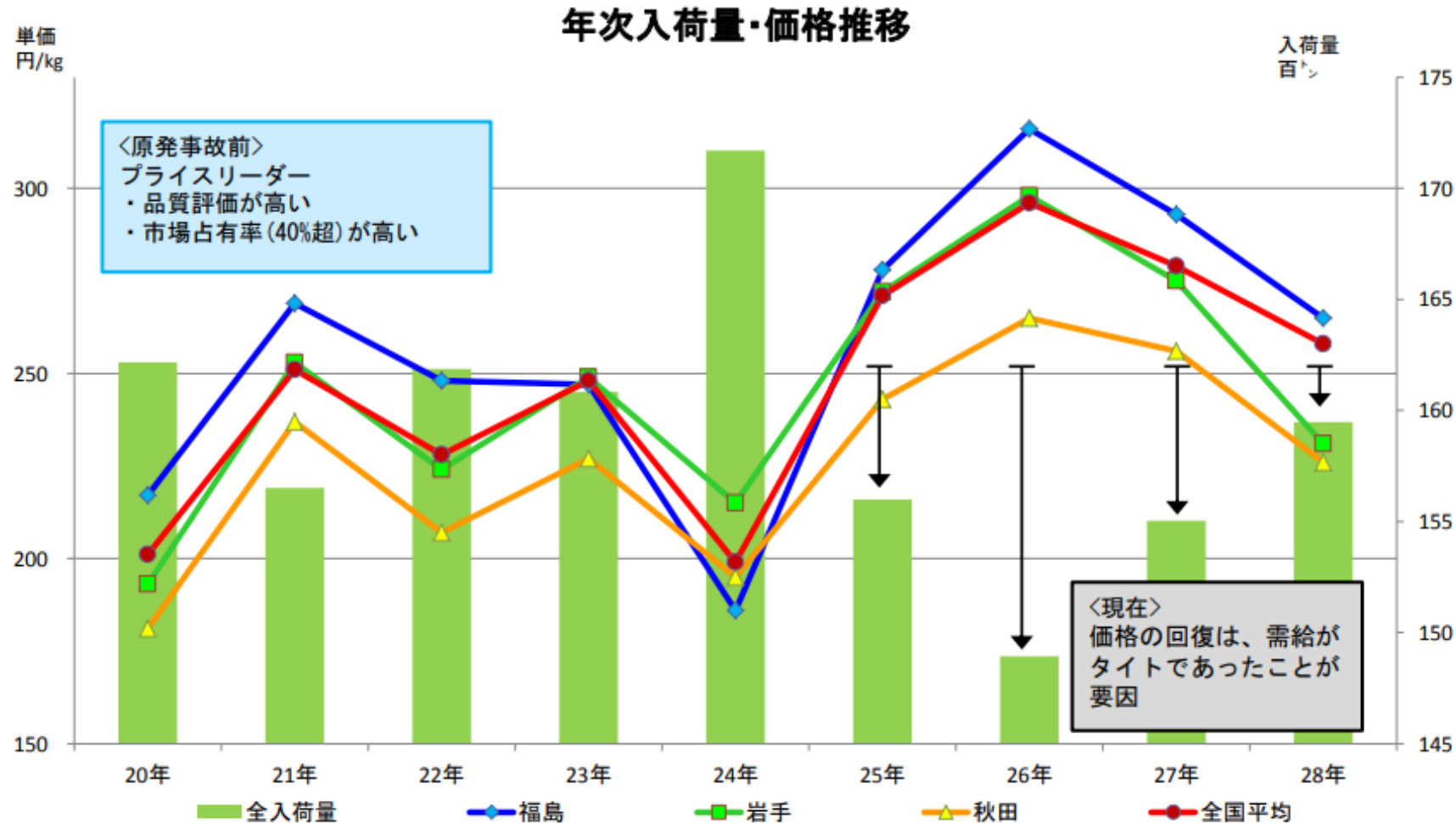
[1]消費者の目に触れるまでのレイヤー①

しかし最も苦戦が長引いた品目の一つだったコメ



[1]消費者の目に触れるまでのレイヤー①

一方で、キュウリの価格推移



注) 東京都中央卸売市場「市場統計情報(7-8月実績)」より

出典: 全農「福島県産農畜産物の風評被害の実情と本会の取組みについてより」
http://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/osensuitaisaku/committee/takakusyu/pdf/004_03_00.pdf

[1]消費者の目に触れるまでのレイヤー①

- きわめて重要な意味を持つ**代替産地**の存在
+ **品目特性**（季節性、保存性等etc.）
- 流通における**スイッチングコスト**
関連業者の廃業等による**流通のボトルネック**の発生
→ **「棚を失った状態」の固定化**と**接触頻度の減少**により、産地ブランド毀損の追加効果
- 「声の大きい消費者」への流通各段階での**過剰な忖度**

流通各段階における「過剰な忖度」の存在

● 農林水産省平成30年度福島県産農産物等流通実態調査

		評価される側					
		卸売	仲卸	加工	小売	外食	消費者
評価する側	卸売	4.0 (104)	3.2 (77)	2.8 (78)	2.8 (91)	2.8 (79)	
	仲卸	3.0 (133)	3.5 (203)	2.5 (82)	2.5 (146)	2.5 (98)	
	加工	3.0 (68)	3.0 (50)	3.1 (176)	2.9 (60)	2.8 (47)	
	小売	3.2 (162)	3.2 (116)	2.9 (132)	3.1 (209)		2.6 (166)
	外食	3.0 (174)	2.9 (115)	2.9 (156)		3.1 (352)	2.6 (183)
	消費者						3.2 (-)

※「5 前向き」「4 やや前向き」「3 どちらともいえない」「2 やや後向き」「1 後向き」の5段階評価の平均値。

全般的に流通の「川下」の福島県産品取引姿勢を**実態よりネガティブに評価する傾向**

しばしば現場で根深いと語られる「贈答需要」問題への示唆

● NHK・東大・福島大調査に関する報道(2019/5/10)

福島県産海産物を「購入したくない」消費者 **14%**

水産関係の**流通業者(東/名/阪/仙)**が考える「福島県産海産物を購入したくないと思っている人の割合」 **50%以上が140社中計76社**

自己充足的予言としての風評被害の側面

● イオン「福島鮮魚便」への反響



2018年6月スタートで2022年現在首都圏を中心に常設14店舗。ほか、愛知・大阪の店舗でも設置実績あり。

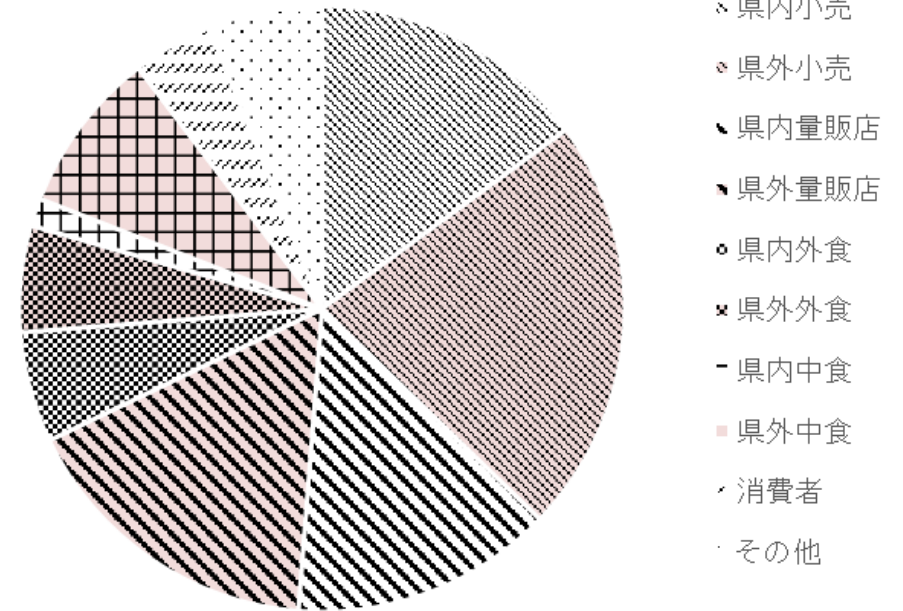
- ・売れゆきは良好。リピーターも多い。
- ・展開前に作成した**想定Q&A集**を使った**機会なし**。
- ・**十分な供給量がなく**、安定して売り場を作れない／
取り組み店舗を増やせないことがむしろ課題。
(イオンデモンストレーションサービスインク担当者、2018.11)

「風評被害」というアジェンダ化が呪縛にもなりうることを、
各関係者は意識すべきという示唆

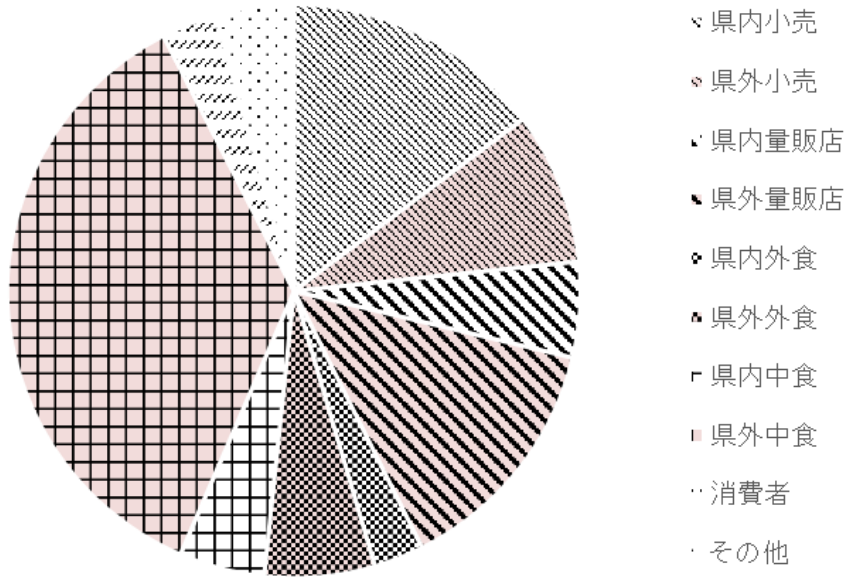
[1]消費者の目に 触れるまでの レイヤー②

福島県『県産米流通状況調査報告書』から五十嵐作成

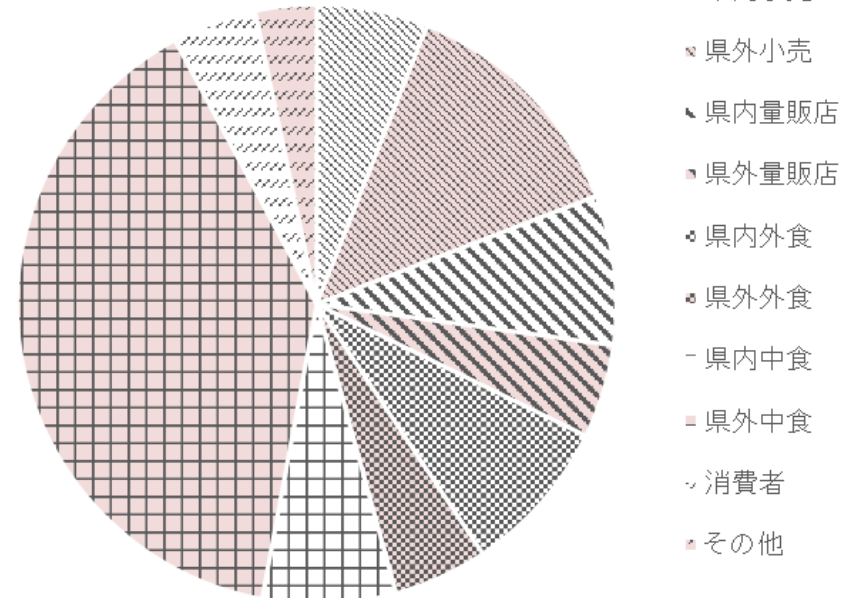
2009年産米 実需者への販路



2012年産米 実需者への販売割合



2015年産米 実需者への販路

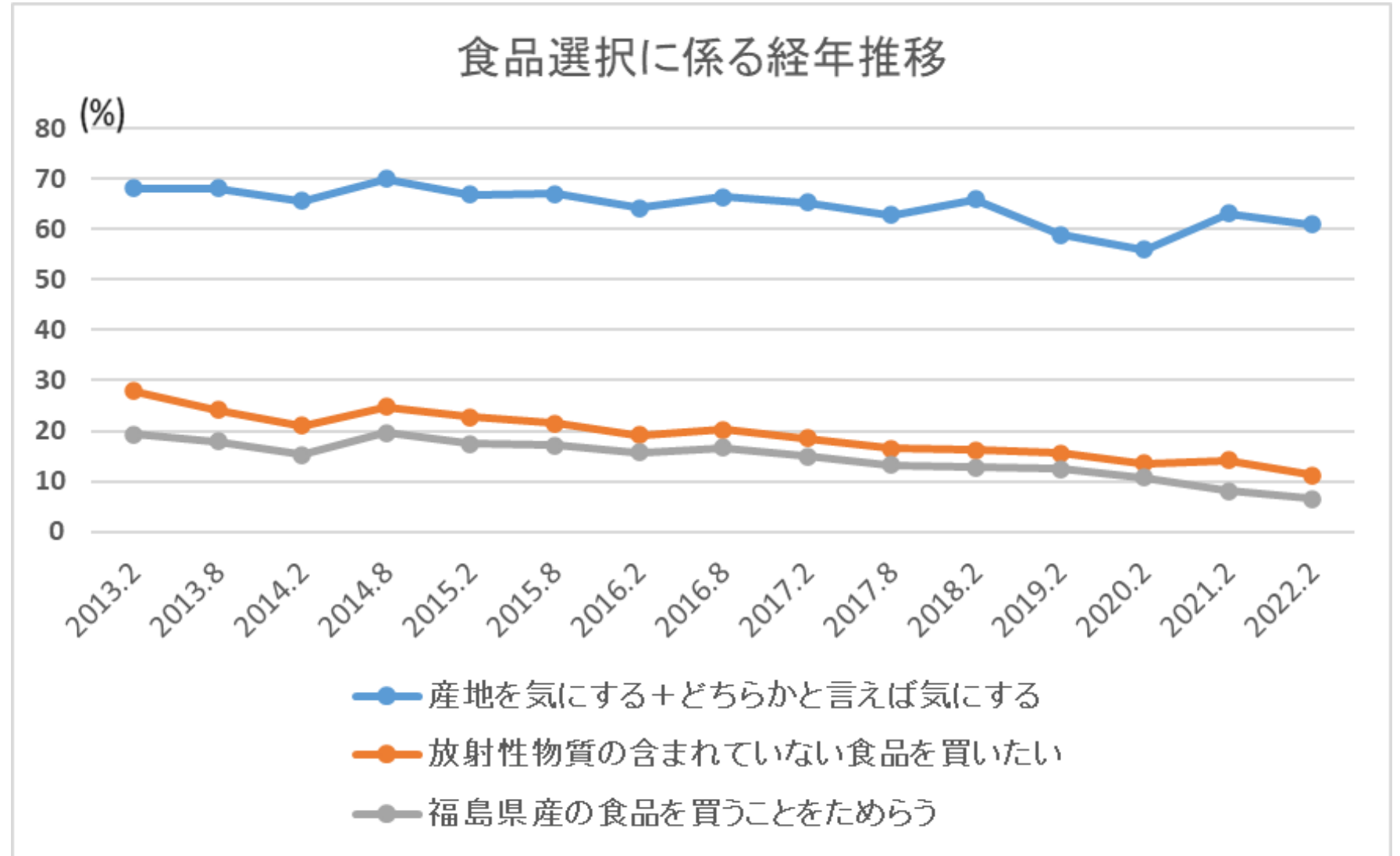


[1]消費者の目に触れるまでのレイヤー②

- 「安全性が確認された」だけではスタートラインだとすれば、何をなすべきか
 - : あらためて問われる産地力
 - : 必要なのは品目ごとに福島県産の長所と短所を踏まえた「**普通のマーケティング**」
- 福島県産コメが中食に使われるようになっているのは「悪いこと」なのか: あくまで目標は**農家所得の向上**

[2]着実に低下してきた福島県産食品への忌避

- 「劇的に減ってきた」わけではないが、直近3年の減少幅は大きい(12.5%→6.5%)



[2]風化＝関心低下の中での忌避傾向減少という現実

● 東京都民対象の三菱総研調査(2017)

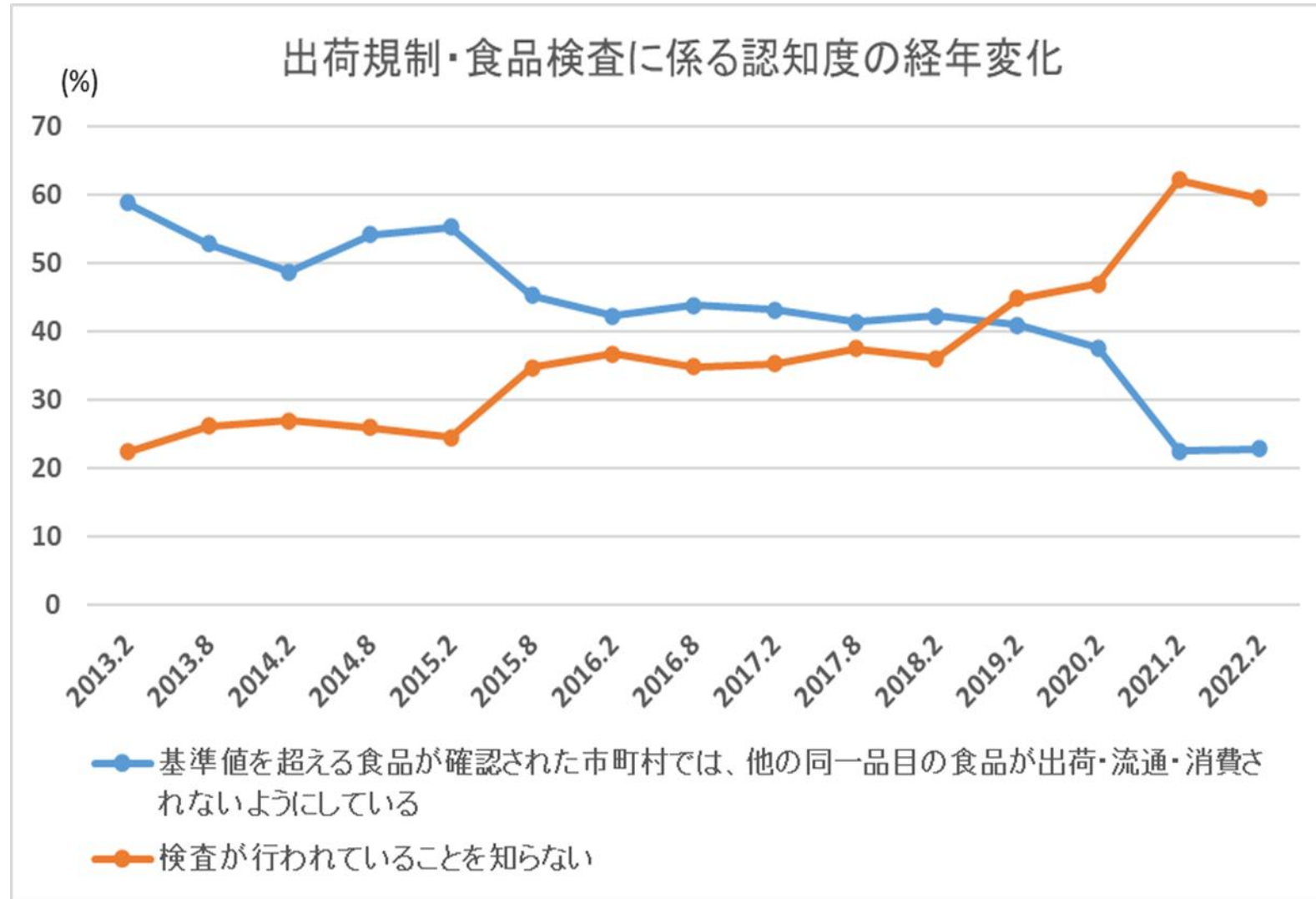
福島県原発事故や震災復興に関する情報をよく見聞きした時期

事故直後～2011年末頃 9.3%

2012年末頃まで 19.8%

2013年末頃まで 17.8%

● 風化とは、関心と危機意識が失われたため、**情報がアップデートされにくい状況**

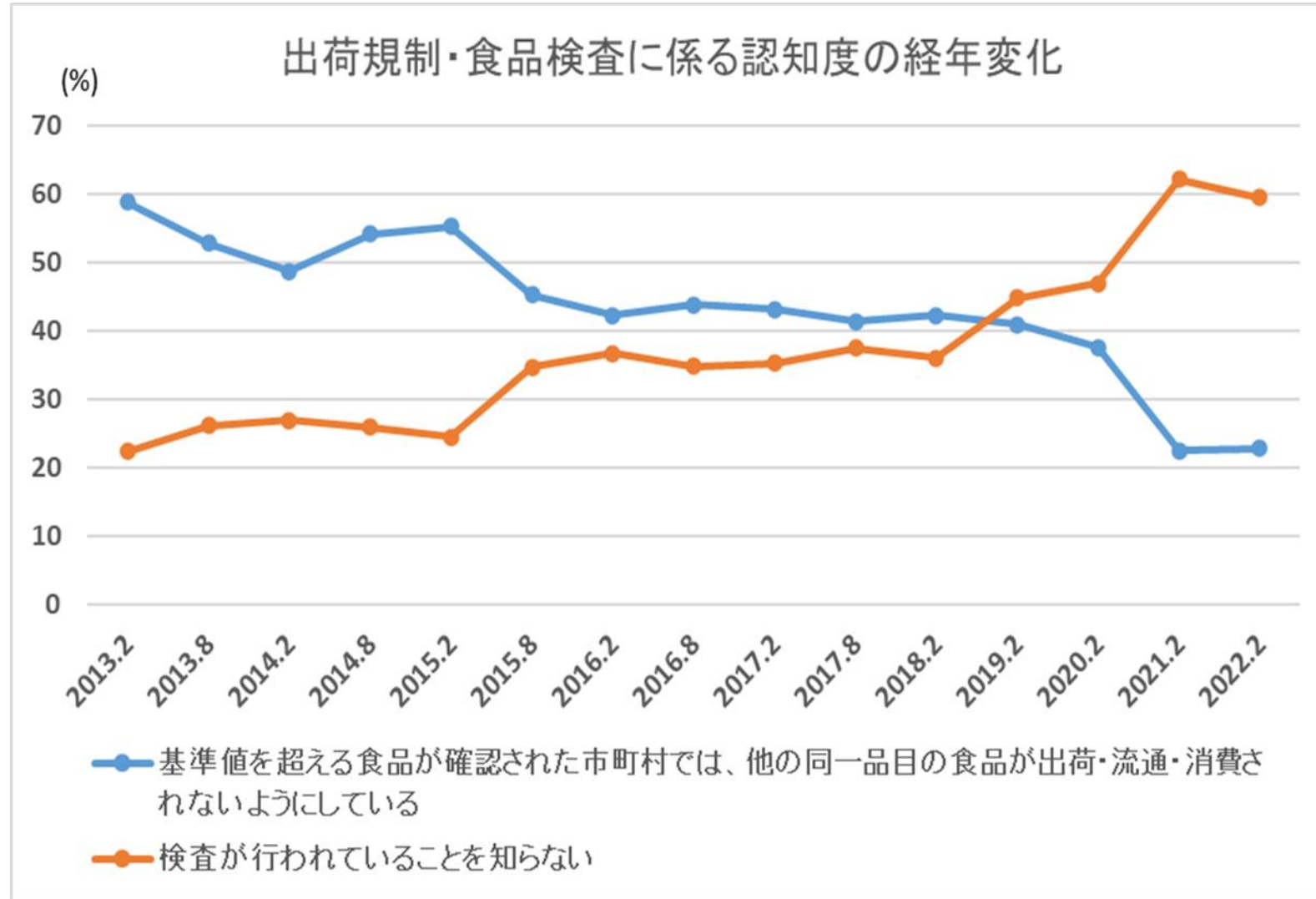


[2]風化＝関心低下の中での忌避傾向 減少という現実

- 直近3年の出荷制限体制・検査への認知の減少幅は大きい

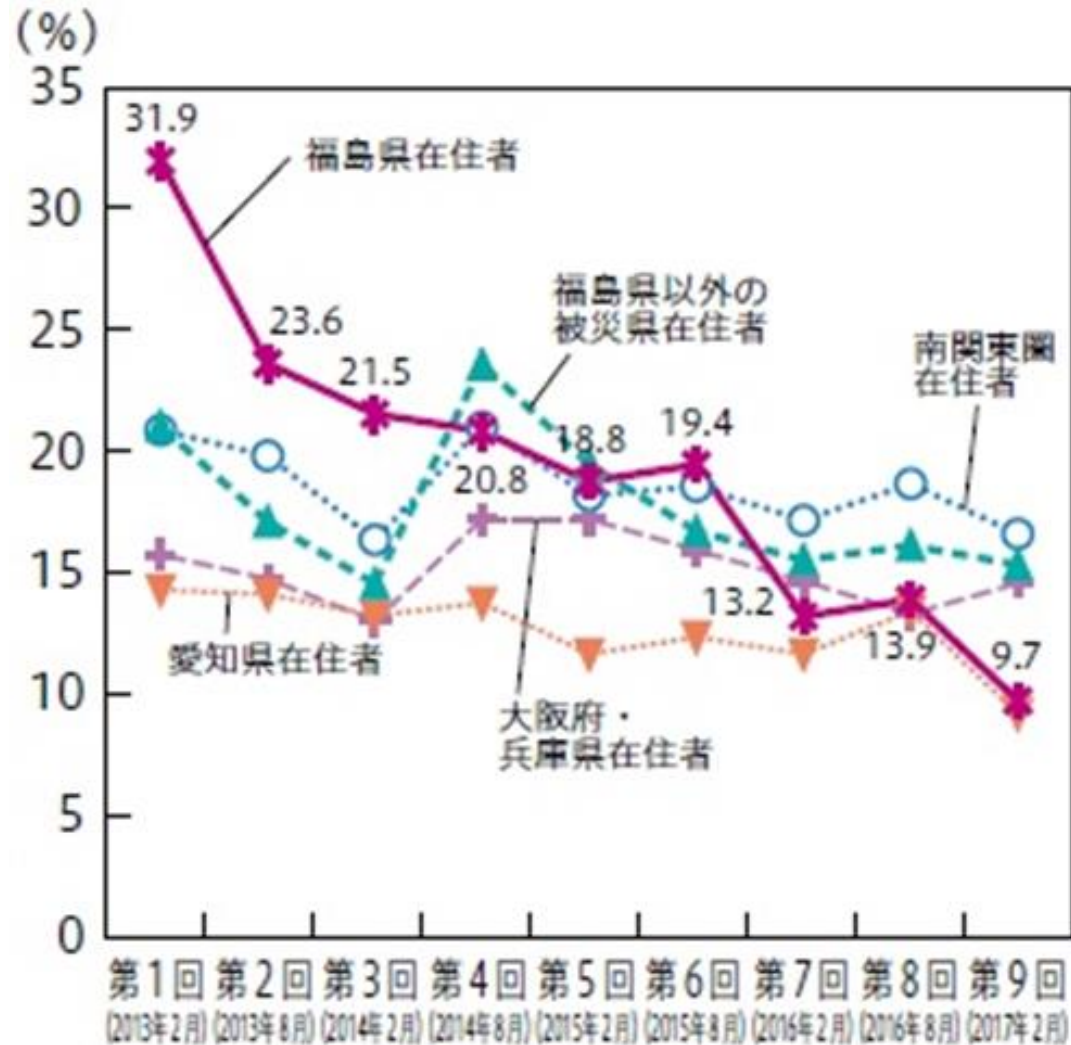
～パンデミックの影響？

- 科学的な説明・啓発は関心低下の壁に阻まれて、**時期を追うごとに効果が限定的になる懸念**



確かに福島県内では自県産品忌避が 大きく減ったが...

- 危機意識・急迫性の高かった福島県内では大きな意味を持った「正しく知って、正しく怖がる」
- 風化＝関心の低下とは、時間の経過とともに、情報がアップデートされない遠隔地のように becoming こと
- 新たな災禍が世間の関心と危機意識を集めるなかで、「福島県内でできたことを全国で」というモデルが可能か？



[2]風化フェーズでの伝え方の再考

- 「福島県産品にかかわらずとも生活が回ってしまう」地域で進まない情報のアップデート
海外ではさらに進まないFUKUSHIMAのアップデート
～ある意味、関心の高かった事故直後より難しい
- 首都圏はおろか福島県内でさえ進む検査体制／出荷規制への認知・放射線知識の減少
⇒単に「正しいファクトを伝える」だけの戦略は時が進むにつれ、さらに分の悪いものに

意思決定における二重過程理論

- システム1 : 自動的に高速回転し負荷がかからないが、感情的・直感的
- システム2 : 論理的で込み入った判断が可能だが、時間と労力を要する
- 人間が何かに注意を払う「予算額」には限界がある(カーネマン『ファスト&スロー』)
- 個人が何に「予算」を払う(＝システム2を起動させる)かは、心理的距離や危機意識(急迫性)によって異なる
- 風化とは、時間の経過とともに、検査情報などがシステム1で判断されていくこと



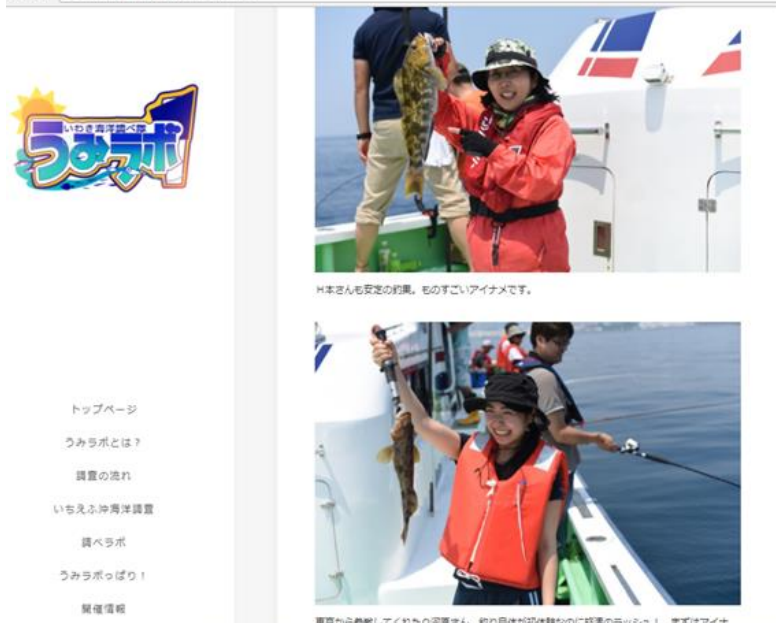
[2]「悪い風化」層への伝えかた

- 事故後のフェーズ認識に応じた「伝えかた」戦略が重要
～ある意味「ネガティブでも話題にしている」時点・地域より、「関心が低下して聞き流される」時点・地域において伝えることの難しさ
- 関心の薄い人たちに知識・情報のアップデートを促すためにこそ、知識や数字（測定結果）を伝える前に、「システム1でまず関心を惹いて、システム2をこじあける」ことが必要
⇒最初のアプローチに必要となる「知りたい」「欲しい」興味の喚起

うみラボ・調べラボの実践と発信①

- 「釣り好きな地元の兄ちゃん」というスタンスのブログ(←主要価値類似性モデル)
- まず目に飛び込んでくる「こんな大きな魚が釣れるんだ!」という驚き
～資源回復した福島の海の豊かさ
⇒海の状況と魚の生態に関する好奇心を刺激し、最後に測定結果を示す

www.umilabo.jp/archives/1859



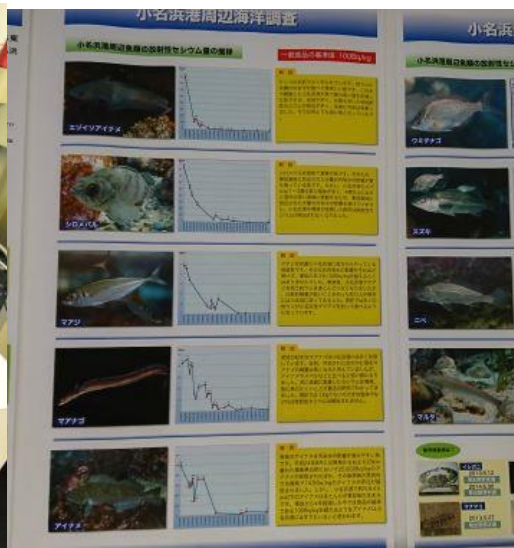
www.umilabo.jp/archives/1859



<http://umilabo.jp/>

うみラボ・調べラボの実践と発信②

- うみラボが提携するアクアマリンふくしま水族館での検体測定イベント
- 放射能ライブ測定、試食体験、検体作成＝さばき方講座における双方向的コミュニケーション、展示などをパッケージした**フックの多さ**
- 普段は何となく福島の魚を避けていた人が、調べラボでは試食体験を躊躇なく楽しんでいるような例も～「まずは食べてみる」という機会の重要性



うみラボ・調べラボの実践と発信③

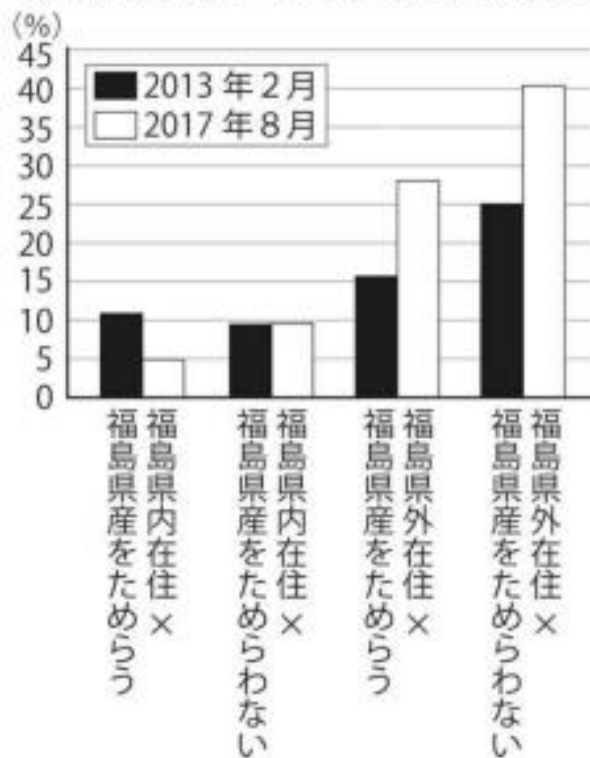
- いずれも、**興味喚起・体験**という入口(システム1)、福島海と魚そのものへの**好奇心の刺激**(システム2)、放射線知識・検査情報の**アップデート**、をひとつのパッケージとして提供するやり方
- 調べラボ来場者アンケート(2017 6-7月)では、「最も印象に残ったこと」は試食体験、「最も福島海への印象を変えたこと」は魚のさばき方講座

に調べラボに参加して変わった福島の海や魚	調べラボで最も印象に残ったこと					
		魚の説明やさばき方講座	会場での放射能測定	会場内の展示物	試食体験	NA
	福島県産の魚介類の安全性について理解することができた	22	8	6	53	4
		81.5%	66.7%	40%	58.2%	
	福島県産の魚介類の安全性についての考えは変わらないが、福島の海や魚の生態への理解が深まった	4	3	9	29	0
		14.8%	25%	60%	31.9%	
	福島の海や魚の生態、福島県産の魚介類について、新たに得た理解や印象は特にな	0	1	0	8	0
		0%	8.3%	0%	8.8%	
	NA	1	0	0	1	1
		3.7%	0%	0%	1.1%	
	計	27	12	15	91	5
		100%	100%	100%	100%	
						n=150

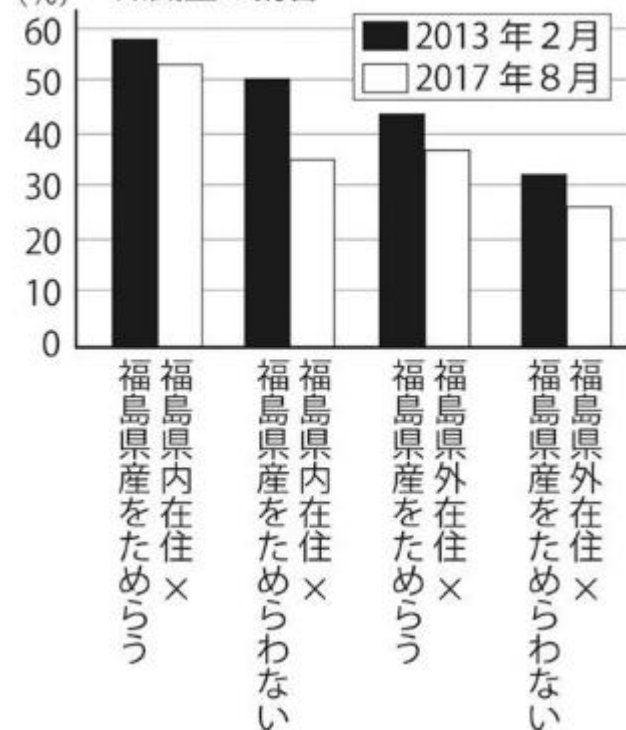
「危険派」は、本当に「勉強してない」人 たちなのか

どのカテゴリーでも「風化」が進む中で、急迫性の高かった2013年の福島県内を除けば、「危険派」のほうが危機意識＝関心が高いのは明らか

検査が行われていることを知らない割合



放射線および健康影響に関する知識量の割合



消費者庁『風評被害に関する消費者意識の実態調査』の個票データより筆者作成。※第1回調査（2013年2月）福島県内×ためらう n=46、福島県内×ためらわない n=98、福島県外×ためらう n=957、福島県外×ためらわない n=4075。※※第10回調査（2017年8月）福島県内×ためらう n=24、福島県内×ためらわない n=120、福島県外×ためらう n=660、福島県外×ためらわない n=4372。

出典：五十嵐『原発事故と「食」』p.97, 129

少なくとも、「危険派」を「勉強不足」と断じるコミュニケーションは、不適切なのではないか

[3]信頼構築が鍵になる強固な忌避層

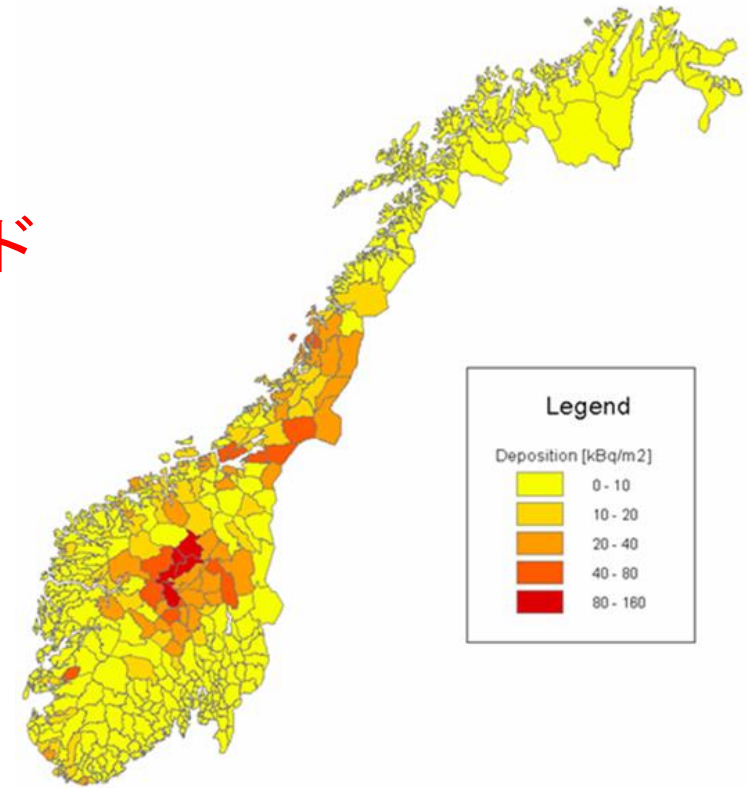
- 事故当初以来の政府、主流派科学者への根強い不信感
～「〇〇問題で嘘ついてた政府が福島で隠蔽してないわけないじゃん」
にどうやって返したらいい？
- 現在の復興状況をネガティブに捉えている群では、放射線知識がリスク認知を有意に高めてしまう、という報告 (shirai et.al, 2019)
⇒ 関連する復興政策全体への信認が必要条件？
- 「何が正しいか」以上に「誰が信用できるか」が重要だった混乱状況
伝統的信頼モデル以上に、**主要価値類似性モデル**に基づいたコミュニケーションが必要だったのでは？（参考：中谷内一也『リスクのもののさし』）

主要価値類似性モデルが示唆するもの

- ポイントとなる**価値観の共有と人格的な信頼**
～「同じ目線で話をしてくれている」と聴き手が感じられるかどうか
属人的な「コミュ力」の問題ではなく、社会心理学的に踏まえておくべきこと
- 有機農家との交流が転機となった京都の自主避難者の事例
～一般的信頼が毀損した状況下で、個別的信頼でそれを補った事例
- 「同じくわからないところから勉強した素人」という態度が有効な場合も
⇔「放射脳」に代表されるような揶揄や軽侮は、自ら断絶を無意味に生み出してるようなもの

[4]最後に残る課題：ノルウェーからの示唆①

- 放射性物質をため込みやすいトナカイの基準値
6000Bq/kg→3000Bq/kg(1994 Nov.～) ※一般食品は600Bq/kg
- 少数民族サーミの文化的保護を考慮した**社会的リスクトレードオフ**の視点
- 一般のノルウェー人のトナカイ消費は年500g
- 一方で、トナカイを常食するサーミに対しては、600Bq/kg超の汚染があれば、代替の肉を買う／clean feedの補償がある
＝自分で食べないトナカイを売ることができる！



Liland, Astrid 2011 "Post-Chernobyl management in Norway"

～きわめて合理的だが、**日本ではありえない**。どうしてそんなことが可能になっているのか、その社会背景を考える価値がある

[4]ノルウェーからの示唆②: 毀損しなかった専門家への信頼と非常に高い一般的信頼

- 他国＝冷戦下の仮想敵国・ソ連で起こった原発事故
- ノルウェーに原発はなく、原発産業と結びついた科学者はいない
⇒【リスク判断】【復興】の領域が、【責任追及】【エネルギー政策】と混せて論じられる素地がなく、科学者の信頼は毀損しなかった
- 際立って高いノルウェーの**一般的信頼**
世界価値観調査(ウェーブ5)「人はだいたいにおいて信用できる」
日本 36.6%、アメリカ 39.1%、ドイツ33.8%、イギリス30.0%、韓国28.0%、、、
ノルウェー73.7%
- 一般的信頼＝社会を効率化させる**社会関係資本**の重要な要素

[4]ノルウェーからの示唆③

:「食」の自己決定と寛容性

- トナカイは完全な嗜好品で食べるも食べないも自由が当然の前提、だから高い基準値に反発がなく合理的な防護が可能になった
- 社会的リスクトレードオフを可能にする”open public debate”
- 対話の前提となる自己決定の尊重と個人主義、異質な隣人への寛容性

「人種の異なる人々」が近所に住んでほしくない: 日本22.3% ノルウェー2.8%
「結婚していない同棲カップル」 // : 日本21.4% ノルウェー0.7%
～世界価値観調査(ウェーブ5)

ノルウェー放射線防護局
アストリッド・リーランド氏



[4] 翻って原発事故後の日本では...

- 政治化した(ものとして受け止められた)「**食**べて**応**援」
 - ～SNSで可視化され、加速する政治的陣営化
 - 【リスク判断】と【責任追及】【エネルギー政策】の不可分化
- 信頼が毀損した環境下で、一部の人々に「食べて応援」がどう響いたか
 - **心理的リアクタンス**の視点: 自己決定の阻害を感じるとかえって反発が
 - 福島県産(地元産)を「食べない」のは差別だと言われる...
不安を言ったらバカにされる...
 - ～地域で放射線の話題が「タブー化」することによる「危険派」コミュニティの尖鋭化の弊害と問題の長期化

考慮されるべき コミュニケーションの「スタイル」①

- 「厳しいお父さん」と「優しいお母さん」はどちらも必要（坪倉正治福島県立医大教授）
- 「もう何年もたって勉強してない人は...」と言ってしまうがちになるが...
科学的ファクトをもとに揺らがぬ「お父さん」だけでなく、寄り添う「お母さん」の必要性も当面続くのでは → **話せる場を確保すること**の重要性
 - ・ 転入者、「新米ママ」の存在
 - ・ 「いまさら心配してる人」の声が出しにくくなることによるタブー化の弊害
→ **ラベリング理論**が示唆する極端なコミュニティでの居場所の獲得
 - ・ 「犠牲を払ってきた人」の **認知的不協和**の問題

考慮されるべき コミュニケーションの「スタイル」②

- とはいえ...デマに苦しめられてきた当事者が怒るのは当然のこと
- **人権侵害**といえる事例への「別枠」での対処
 - : 特に加害性の強い「遺伝」「伝染」
 - ～ **人権教育としての放射線教育**は全国的に必要
- そのうえで、相互の**意思決定の尊重と寛容性の規範**
 - 科学的 이슈が「政治化」しないことへの特段の自省／自制が必要
- **何を目的としているのか、そのために誰に伝えようとしているのか**
 - 人権侵害に直結する差別的デマを止めなければいけないのか
 - 自己決定を前提とした食や観光の分野で復興・振興をはかるのか